

若い女性たちにジェンダーを教えることの困難 —ポストフェミニズムの諸言説をのりこえる カリキュラム構築に向けて—

The Difficulty of Teaching Gender to Young Women: Constructing a Curriculum that Moves beyond Discourses of Postfeminism

虎 岩 朋 加

はじめに

本稿では、ジェンダーを教えることにかかわって、新自由主義によって助長された個人主義的なジェンダー解釈をするカリキュラムのモデルから脱却し、歴史的社会的に共有された諸状況を理解することに基づくカリキュラムのモデルを構築することの必要性を示していきたい。

若い世代へどのように伝えるかということを考えるとき、フェミニズムは、困難な状況にある。2000年代以降、主に英米の研究者たちによって、ポストフェミニズムという状況について考察が行われてきた。その名が示すように、フェミニズムの「後」、すなわち、フェミニズム以後の状況をこの言葉は示している。例えば、三浦玲一は、『『ポスト』フェミニズムとは、『フェミニズムは終わった』という認識であり、また、フェミニズムが終わったとして『その後の女の問題』という意味でもある』と述べている⁽¹⁾。ポストフェミニズム的状况に特徴的とされるのは、80年代にすでに存在した反フェミニズム感情や、それに基づく、バックラッシュなどの現象が、若い世代に広がっていることを示すものであり、若い女性たちによるフェミニズムへの拒否的態度であるとも言われる。バックラッシュは、米国に限らず、日本でも見られた。1983年の女性に対するあらゆる差別撤廃条約の批准、それに続く、男女共同参画社会基本法、男女雇用機会均等法の成立に対する保守派のリアクションとして、日本におけるバックラッシュは考察されてきた⁽²⁾。このバックラッシュの現象と比較して、ポストフェミニズム的状况が示す、フェミニズムに対する拒否感、男女平等を達成したことを強調する態度から生じるものである。フェミニズムの役割は終わったのに、それでもなおかつ、フェミニズムを持ち出す人々への拒否感であり、フェミニズムが無用になったことを主張するものである。

ポストフェミニズム的状况は、教育の現場においては、ジェンダーに関

わる事項を教える際に、教師にとって、その教育目標達成を邪魔する障害ともなりうる。なぜなら、若い女性たちは、「男女平等」な教育的環境において教育を受けており、かのじょたちにとっては、女だからといって「差別される」ような時代は過去のものであるからである。弱い立場としての「女性」、差別される対象としての「女性」というラベルを貼られることに、抵抗を示す。極端に言えば、かのじょたちは、教師側が示す女というジェンダー・アイデンティティのカテゴリーに、自分自身を見出すことを拒否するのである。かのじょたちにとっては、ジェンダーの不平等は、歴史的な過去の遺物に過ぎず、そのため、ジェンダーについて学ぶことに意義を見出すことができない。もし、女性であることによって不平等を被っている女性があるのであれば、それは、その個人の瑕疵であり、「個人的な問題」に過ぎない。あらゆる問題は、個人的な問題であり、ジェンダーの問題ではない。そうであれば、女性の連帯などというフェミニズムの運動は、成立し得なくなり、「ジェンダーを教える」という教育行為は、意味をなさなくなる。

他方で、最近では、若い世代の女性たちによるフェミニズム讃歌の傾向が見られるようになってきた。日本では2016年の初めに、若い女性をターゲットとするいくつかのファッション雑誌の中で、フェミニズム特集が組まれた。また、ファッション雑誌のインターネットサイトでも、フェミニズムについての肯定的な記事を見ることができる。それらは、フェミニズム的価値観の称揚とも言えるものである。米国でも、若い世代の間のフェミニズムが話題となっている。*New York Times*では、しばしば、フェミニズムに言及されるけれども、例えば、2014年の“Who Is a Feminist Now?”という記事では、「その前年にかけて、大衆文化の世界でフェミニズムがあちこちに登場した」と述べている⁽³⁾。それによると、2013年10月にはファッション雑誌の*Glamour*が「新しいことをやろう：自分をフェミニストと呼んでみよう」という特集記事を掲載したし、フェイスブックの最高執行責任者であり、*Lean In*の著者であるSheryl Sandbergは、2013年4月、インターネットの生中継The HuffPost Liveで「わたしは、『フェミニズム』という言葉喜んで受け入れている。自分のこれまでのキャリアの中ではそうしてこなかったし、その理由も本の中で書いていたけれど、今は違う。フェミニズムとは『世界は平等であるべきで、男性と女性は平等の機会を与えられるべきだ』と信じることだから」と明言した。

同記事ではさらに大きな動きとして、ソーシャルメディアで大反響を起こした、Beyoncéのフェミニストとしてのカミングアウトを紹介してい

る。Beyoncé について言えば、フェミニズムに対する大変曖昧な態度で知られていた。“Run the World (Girls)” という楽曲などを世に出してきた一方で、彼女自身は、自分をフェミニストとみなすかという質問に対しては、「わたしは『現代のフェミニスト』だと思う」という言い方を好んでいたし、また「どういう女性かを、何で選ばないといけないの？何で、自分にラベルをはらないといけないの？わたしは、単なる女性だし、女性であることが好きなの」という言い方をして、フェミニズムについて自らの態度を曖昧にしてきた。

しかし、2013 年 12 月に彼女が出したアルバム Beyoncé では、彼女のフェミニズムに対する態度が明らかになっている。アルバムの中の 1 曲 “Flawless” では、ナイジェリア人作家の Chimamanda Ngozi Adichie (Adichie 自身も現代のフェミニストアイコンの一人) の TED でのスピーチ「わたしたちはみんなフェミニストであるべきだ」(2013 年 4 月) から「フェミニストとは、社会的、政治的、経済的な男女の平等を信じる人」などを引用した⁽⁴⁾。このアルバムで、Beyoncé は、自らのフェミニストとしての立場を鮮明にしたと言える。このような大衆文化におけるフェミニズム肯定の動きとともに、人々の意識にも変化が見られるという(大衆の意識の変化が、セレブたちのフェミニスト宣言につながっているかもしれないので、どちらがどちらを引き起こしているかについては、わからないが。)例えば、米国のフェミニスト雑誌 *Ms.* によると、2012 年の大統領選挙の女性投票者のうち、自分をフェミニストと見なす人の比率は、2008 年の 46% から 2012 年は 68% に増加したという⁽⁵⁾。

さらに、最近では、米国のオバマ大統領が、フェミニズムについてのエッセーを雑誌に投稿したり⁽⁶⁾、カナダのトルドー首相が自分はフェミニストであると述べたりしている⁽⁷⁾。映画 *Harry Potter* シリーズで、Hermione Granger を演じて著名女優となった Emma Watson も、2014 年 9 月に UN Women Goodwill Ambassador として、ジェンダー平等についての演説を行ったが、その中で、はっきりと、自らをフェミニストと呼んでいる⁽⁸⁾。*New York Times* の記事が示すように、フェミニズムという言葉は、大衆メディアのあちらこちらで見られる。フェミニズムをめぐる動向は、ポストフェミニズムの状況を脱して、肯定的なものに転じているようにも見える。日本のファッション雑誌などにおけるフェミニズム讃歌も、上記の北米での動きに応じたものとみなすことができるだろう。

これらの近年のフェミニズムをめぐる肯定的な動向は、第二波フェミニズム運動で中心的な概念として掲げられたエンパワーメント

(empowerment) という言葉に集約されるものとも言える。賃金における男女平等や、政治的、経済的、社会的な領域における男女の平等、性役割からの自由というメッセージを、近年のフェミニズムは主に伝える。そのためには、女の子たちに、自信をもたらし、自己を肯定的に捉え、社会的な成功に向けての強い向上心を持たせるということを共通の関心事として持っていると言えるだろう。

こうした最近の若い世代の間のフェミニズムの興隆は、ポストフェミニズムの状況を打破するものとなるのだろうか。「ジェンダーを教えること」が再び意味ある行為として浮上するのだろうか。本稿では、ポストフェミニズムと最近の若い女性たちの間でのフェミニズムの称揚は、同じ根を共有していると議論したい。若い女性たちに見られる、一方で「フェミニズム的」と見られるような価値観の讃美、他方で、フェミニズムに対する一定程度の拒否感を示すポストフェミニズムのいずれも、実は、自由な個人主義への志向性を示している。これらは、同じものの異なる様相を示すに過ぎない。つまりは、新自由主義による資本主義構造を背景とした個人主義的主体の志向性を表現したものである。フェミニズムは、新自由主義的個人主義にハイジャックされたが、そのハイジャックの様は、一方で、ポストフェミニズムという表現を取り、他方で、一般に広まるフェミニズムの称揚という表現を取っているのである。その意味では、若い世代の間のフェミニズムの称揚は、ジェンダーを教えることの意義を浮上させるのではなく、むしろ、より困難なものにすると思われる。

本稿では、まず、第二波フェミニズム以降のフェミニズムの変遷を見ていきたい。その後、ポストフェミニズムについて、研究者たちがどのように論じているのか、概観する。次に、「ジェンダーを教える」ことに関わって、ポストフェミニズムの状況が、教育環境に何をもたらしているのか、Cris Mayo の議論を参照する⁽⁹⁾。そして、最後に、最近のフェミニズム讃歌が、ポストフェミニズムとその根をどのように共有しているのか、考察する。

1 「フェミニズムの死」をめぐる

「フェミニズムは死んだのか (Is Feminism Dead?)」は米国のメディアに繰り返し現れるフレーズである。1935 年の *Harper's Magazine* には、「Is Feminism Dead?» の記事が見られる⁽¹⁰⁾。しかし、これはフェミニズム内でのフェミニズム批評であり、フェミニストたちが、フェミニストがなんなのかについての意味を見失ってしまったという趣旨の記事である。

その約半世紀後、「Is Feminism Dead?» というタイトルは、*Times* の表

紙を飾る。1998年6月の*Times*の表紙には、真っ黒な背景に、3人のモノクロの写真、Susan B. Anthony⁽¹¹⁾、Betty Friedan⁽¹²⁾、Gloria Steinem⁽¹³⁾と、Ally McBeal⁽¹⁴⁾のカラー写真、Allyの写真の下には真っ赤な字で“Is Feminism Dead?”のフレーズを見ることができる。前者の3人は、いずれも第一波、第二波フェミニズムの運動の主要な人物である。そして、後者は、テレビドラマに登場する有名な女性弁護士である。Ally McBealは、フィクションのキャラクターではあるものの、当時の女性を代表する女性として登場する。

この号のリード記事では、ジャーナリストのGinia Bellafanteが、「60年代と70年代のフェミニズムが、研究に足を踏み入れ、社会変革以外、目に入らなかったとすれば、今日のフェミニズムは、セレブリティの文化、自分のことにしか目が向かない文化と結婚してしまった」と嘆く。Bellafanteの記事において、Ally McBealは、社会の変革に関心のない、自分のことにしか関心がない、気概のない若い世代を具体化するものとして、提示されているのである。

Bellafanteによる記事は、第二波フェミニズムに深く関わった女性と、その後に来た女性たちとの間にわたる溝を描いたものということができる。第二波フェミニズムの運動に参加した女性たちは、男女の賃金格差、女性が昇進などで直面するガラスの天井、性に関する決定権であるリプロダクティブ・ライツに、真剣に取り組んできた。第二波フェミニズムに傾倒したBellafanteのような人々にとって、若い世代の女性たちは裏切り者である。かのじょたちは、実質的な不平等に取り組んでいないからだ。自分自身の見かけや、自分自身の社会的成功や、私生活の充実にはしか関心が向いていないのである。他方で、若い世代の女性たちにとって、第二波フェミニズムは、ただ一つの女性のイメージに基づいた運動であり、白人女性の異性愛主義者の関心に取り組んでいるに過ぎない。

上記に示された第二波フェミニズムと、その後のフェミニズムをめぐる状況の描写は、一面的に過ぎない。その理由の一つに、第二波フェミニズムの後をめぐる状況には、第二波フェミニズムが目指したもののからの断絶と接続の複雑な絡み合いを見てとることができるからである。一口に第二波フェミニズムの後と言っても、ポストフェミニズムのような状況もあれば、第二波フェミニズムの問題意識や、抵抗のための手法を批判的に継承していこうとするフェミニズムの運動もある。*Times*の表紙に代表されるような、フェミニズムをめぐる世代間の対立という提示の仕方は、広く一般に受け入れられるような構図だけれども、その構図の中の微細で複雑な

諸要素を見逃してしまうことは、それに抗おうとしても、「フェミニズムの死」という人口に膾炙する見方に、知らずに加担してしまうことにもなりかねない。

2 英米のポストフェミニズムの議論と日本の「ポストフェミニズム的」状況

本節では、菊地夏野による英米のポストフェミニズム的状况についての文献レビューと、ポストフェミニズムに相当する日本の状況についての考察に依拠して、ポストフェミニズムの状況がどのようなものかを理解したい⁽¹⁵⁾。ポストフェミニズムについてのさまざまな論者の議論を、菊地は、次のように簡潔にまとめている。「多くの論者の指摘に共通するのが、『女性の成功』を称揚するというポストフェミニズムの特質である。フェミニズムは女性の集合体としての社会的地位の向上を目指したが、ポストフェミニズムにおいてはあくまで個人的な成功に価値がおかれる」⁽¹⁶⁾。

例えば、菊地によれば、Angela McRobbie は、ポストフェミニズムでは、『エンパワーメント』や『選択』という言葉がより個人主義的な言説へ変換され、メディアやポピュラーカルチャーの中で、さらに国家の政策として、それらの言説がある種のフェミニズムの代替として展開されている」と分析しているという⁽¹⁷⁾。また、Shelly Budgeon は、「男女平等が達成されたと認めることが、ポストフェミニズム言説の駆動する前提」だとしているという⁽¹⁸⁾。さらに、「ポストフェミニズムは女性の主体性を肯定するのだが、その主体性の展開には興味深い特徴がある」と分析するのが、Rosalind Gill だという⁽¹⁹⁾。菊地のまとめによれば、ポストフェミニズムにおいては、「セクシーな身体」が女性のアイデンティティの鍵となる要素であり、権力の源泉と定義され、「女性の「セレブ」の身体が、執拗に、細部にまで渡って呈示され、その形や、サイズ、標準との差異、変化が語られる」という⁽²⁰⁾。それは、「文化の性化」とも呼べるような現象であり、その中で、女性は、「性的対象から欲望する性的主体」へと変容をたどったと、菊地は説明する⁽²¹⁾。第二波フェミニズムの女性の性に関わる自己決定権を求める運動の成果とも言えるが、しかし、Gill は、「欲望する性的主体」は、「客体化より、高度な、より深い搾取の形式」だと論じているという⁽²²⁾。つまり、「欲望する性的主体」となることによって、劇的なまでに自己監視が強化され、生と関係性にわたって自己監視の網が拡張され、さらには、自己の内的生活の変化までもを要請するのである⁽²³⁾。規律訓練的な主体のあり方が、より一層強化されたものとも見られる。

上記に示される英米のポストフェミニズムと比較して、菊地は、日本でのフェミニズムに対する評価の特徴を、以下のように概要している。「英米のポストフェミニズムの傾向とは違い、そもそもフェミニズムに否定的な評価が先立つのが日本の特徴である。パジェオンが指摘したような、フェミニズムの成功を承認することによってその終了を宣言するポストフェミニズムの特性は、日本ではそもそもフェミニズムの成功を認める言論が少ないという点で当てはまらない」⁽²⁴⁾。日本においては、フェミニズムは承認されることなく、終わってしまったというのである。

日本での女性の社会進出は、むしろ、社会の進歩や民主化に伴う当然の変化として受け止められ、フェミニズムによって獲得されたものとは見なされないと、菊地は論じる。確かに、わたしたちは、教育学の言説として、「男女平等教育の推進」を戦後の民主化に伴うものであると、当たり前を受け入れてきた。「男女平等」は、社会の進歩に伴って、自然ともたらされたものであり、民主化された経済大国としては、男女平等政策は当然のことであると、わたしたちは考えている。フェミニズムの運動が勝ち取ってきたものとして「男女平等」を考えることはない。政治的権力が主導する政策や法律が、男女平等化を推し進めたのであり、また、経済的な成長が、男女の平等を実質化したのであると、思われているのである。ここに、フェミニズムの成果を承認する余地はない。

近年、専業主婦願望を持つ若い女性が増えてきていることや、「女子力」といった言葉の流通に、英米のポストフェミニズムに特徴としてあがっていた「性的差異の再強化」を、菊地は見ている。「新たに定義された性的差異は、まさに女性たち自身の身体と意識の中で確立され、生きられているのである。彼女たちは、男性中心社会において男性的な成功に向かって競争に参入しながら、同時に、女性的な新体制を体現するために日々向上しなければならない。そこでは矛盾する価値を統合し、文脈や場面に応じて使い分けなければならないため、常に緊張と葛藤の渦中にいる」⁽²⁵⁾。その意味では、日本では、フェミニズムに対する一般的な社会的承認がないままに、ポストフェミニズムの状況へと突入したとも言える。

以上のような現在の日本の状況を「フェミニズムにとっての逆風」と名付け、菊地は、以下のように評する。「ここにおいて、フレイザーが論じたフェミニズムとネオリベラリズムの結びつきがまた違った意味で証明されるし、その大きな構図の内部でポストフェミニズム的状況の存在が見てとれる。女性はネオリベラリズムによって貧困を悪化させながら、そこから逃れるために古い女性性を新しい方法で身体化させなければならない。

その身体化の方法的新しさは、フェミニズムと見紛う男女共同参画や女性の活躍などのポストフェミニズム言説とネオリベラルな権力志向によって構成されている」⁽²⁶⁾。

菊地が論じるように、英米とともに日本でも見てとれるポストフェミニズム的状况は、Nancy Fraser が「資本主義の侍女となったフェミニズム」と描くものを共通の背景に持つと言える⁽²⁷⁾。Fraser によれば、第二波フェミニズムの闘いは、新自由主義の精神を持つ資本主義の展開に貢献をした⁽²⁸⁾。女性の解放という第二波フェミニズムの言説を利用し、新自由主義の精神を持つ資本主義は、女性をまさに解放した。それはつまり、国家管理型の資本主義社会において備え付けられていたセイフティー・ネットから解放し、市場経済の中に放り出した上で、自己責任という形で搾取を進めていくことであった。女性たちの日々の努力に倫理的な意義を与えることで、フェミニストのロマンは、ガラスの天井にヒビを入れることを決意した、専門的な職業につくミドルクラスの女性たちの中核的グループも、その対極にあって、所得や物質的な安定を求めるだけでなく、自己の尊厳や、より良い自己、伝統的な権威からの解放を追い求める女性の非正規雇用者、低賃金のサービス産業従事者、移民などの女性たちのどちらも魅了したのだとする⁽²⁹⁾。その結果、「女性の解放という夢は、資本主義を成長させる動力となった」のである⁽³⁰⁾。フェミニズムはネオリベリズムに正当化の言説を与え、ポストフェミニズム的状况は、日本においても英米においても、自由な自律的な主体とも見なしうる主体を女性に実現した。しかし、その実現は、さらなる自己監視、自己規律、自己責任を個人に課すものであることを、ポストフェミニズムは巧妙に覆い隠しているのである。

3 教育のポストフェミニズム的状况—女の子たちのディスアイデンティフィケーション

以上のような、ポストフェミニズム的状况が、教育の現場において、どのように表出するのであろうか。前節で言及した Angela McRobbie は、エンパワーメントや個人の選択という個人主義的な言説を背景として、大学の教室で、女子学生がフェミニストの教員に対して、「わたしたち (we)」として括られることを拒否するように、フェミニズムに対する激しい拒否や告発が広がっている「文化的なポストフェミニズムの空間」の存在を指摘する⁽³¹⁾。こうした「わたしたち (we)」として括られることへの女子学生の拒否や告発を、Cris Mayo は、ディスアイデンティフィケーション

(disidentification) の現象であると論じている⁽³²⁾。この場合、ディスアイデンティフィケーションとは、フェミニズムが提示する女性のイメージと、かのじょたちがみなすものを、自分のアイデンティティとはもはやみなさないことを意味する。

Mayo は、学校教育のカリキュラムや法的な動きが、女子学生たちの女というアイデンティティにもはや同一化しないことの背景にあると述べる⁽³³⁾。例えば、法的な観点で言えば、セクシュアルハラスメントという概念の法での取り扱いが、セクシュアルハラスメントの背後にあるより大きな問題から、意識をそらせるものとして作用していると Mayo は論じる⁽³⁴⁾。法的な裁判においては、訴訟はいつも、個人的なものとして争われる。したがって、社会制度的な関係にわたるジェンダーの不平等については法廷で争われないままとなる。そのために、セクシュアルハラスメントは個人的な問題であるという考え方が、さらに補強されることとなる。若い女性たちにとって、セクシュアルハラスメントは、女性というアイデンティティに自己を同一化させないことによって、回避できるものとして理解されることとなる。

フェミニストでない女性たちは、かのじょたちがフェミニストとして知覚する像から、自分自身を切り離そうとする。このような切り離しについて、フェミニストたちが提示するジェンダーが、フェミニストでない女性たちの経験するジェンダーとは異なるという説明ができるが、実際、「自分のアイデンティティとはもはやみなさない」ことの背景には、知識に対して経験が権威を持つという見方があると Mayo は分析する⁽³⁵⁾。女子学生たちは、「わたしの経験の範疇外」として、「女性たちの経験」をみなす。さらに、そのような認識に基づいて、ジェンダーのカテゴリーに同一化することをしなくなる。だが、結果的に、それは、個々人を社会的勢力や歴史的な背景から切り離すことになり、アイデンティティを個人主義的なものにしてしまう。自らの行為は女というカテゴリーに収まらないとして、ジェンダーという考え方を退けることは、かのじょたちをして、「無印の自由な主体」であると、自分自身をみなすように仕向けるが、同時に、諸々の力関係が、かのじょたち個々人に作用していることを見逃すことにつながる⁽³⁶⁾。

このことは二つのことに帰結すると Mayo は言う⁽³⁷⁾。一つは、例えば、セクシャルハラスメントという文脈において、セクシュアルハラスメントに、もしかのじょたちが出くわした場合に、ハラスメントを自らのジェンダーとかかわらせることが不可能になるということである。言い換えれば、

かのじょたちの個人的な欠点や欠陥が、セクシャルハラスメントを引き起こしたのであり、そのネガティブな影響を自分自身の欠陥のせいにするということとなるということである。ここにおいて、ジェンダー教育の意義とは、学生たちに、ジェンダー・アイデンティティについての理解を促すことで、まさにハラスメントが起こっている場所で、エイジェンシーの感覚を得ることを助けるだろうし、また、その後もエイジェンシーの感覚を保持することを可能にすることにあると、Mayo は指摘する⁽³⁸⁾。

二つ目には、同様な経験を持つ他の若い女性たちとつながることを妨げるということである⁽³⁹⁾。セクシャルハラスメントの犠牲者を、その人の個人的な失敗の経験としてみなすことは、経験と経験の断絶を余計に強化することになり、連帯の政治は不可能となる。これは、女性間の断絶につながり、つまりは、新自由主義のイデオロギーが要請する個人主義を後押しすることになる。

ハラスメントの事例（あくまで事例の一つであるが）を通して明らかにするのは、ジェンダー教育は、個人主義的な説明モデルから、現代の社会的相互作用の様々な暴力形態を歴史的、政治的に問い質すモデルへの移行が求められるということであり、このようなモデルの移行を Mayo は、主張している⁽⁴⁰⁾。さもないと、「ジェンダーを教える」ことの意義は、失われたままとなること、さらには、新自由主義を背景とする個人主義的イデオロギーの保存に加担してしまうことが、含意されるだろう。

4 最近のフェミニズム的価値の賞讃

ここ数年の間、ポストフェミニズムの状況とは異なるように見える、若い人たちの間のフェミニズムへの関心が高まってきている。2016年3月に発行された海外ファッション雑誌の日本版である、ELLE JAPON（エル・ジャポン）2016年3月号と GOSSIPS（ゴシップス）2016年3月号には、フェミニズムが特集された。後者の特集には「いまセレブ達の間でフェミニズム旋風が吹き荒れ中！あなたもフェミニズム運動に参加して！」というタイトルが付けられている⁽⁴¹⁾。取り上げられるセレブたちは、Taylor Swift、Beyoncé、Emma Watson、Ellen Page などである。雑誌の中には、「Girl Power!」とか、「Be a boss!」とか、「Feminism Check List!」などの文字が躍る。セレブたちの言葉が引用され、フェミニズム運動に参加することが、クールなこととして描かれている。

インターネット上のファッションメディアでも、同様のことが起こっている。2016年2月から、VOGUE JAPAN のサイトでは、「Vogue Girl と考

えるフェミニズム」と題して、度々、フェミニズム関連の記事が掲載されるようになった⁽⁴²⁾。最初の記事は、「フェミニズムについて考えてみる～COOLなイット・ガールズのフェミニスト宣言」と題され、以下のようなリード文が付いている。

モード界ではジェンダーレス化が進み、もはや服装で男女の違いを語るのは時代遅れ。女性だって男性誌を参考にするし、メンズアイテムをうまく取り入れるのもおしゃれのひとつ。そんなふうに見た目はジェンダー問わず“自分らしさ”が受け入れられる社会だけれど、実際に生活している現場ではジェンダーレス化は進んでいない。むしろ、女であることを意識せざるを得ない現場に毎日直面している。“女だから”って性別で片づけられたり、見た目や体型で判断されたり、その現場はたいてい悲しい。“自分らしさ”を楽しみ、お互いが相手を尊重する社会。外面だけでなく、内面からもジェンダーレスの社会になったら……

以上のようなフェミニズムについての表現に、何を見いだすことができるのだろうか？メンズアイテムを取り入れるのもおしゃれの一つ、「おしゃれ」は個人的なものという表現は、何を含意しうるのだろうか。見た目は「ジェンダーレス化」しており、「自分らしさ」が受け入れられる社会とは、何を帰結するのだろうか。「女だから」と性別で片付けられたり、見た目や体型で判断されたりすることを拒否することは、確かに、フェミニズムの運動が、抵抗してきた社会の側面の一つである。特に、第二波フェミニズムは、自らの身体を自らに取り戻すこと、男性中心的な他者の言葉で定義されない自己身体の回復を目指してきた。その意味で、「COOLなイットガールのフェミニスト宣言」は、第二波フェミニズムと共有する核のようなものを示している。

他方で、「女であることを意識せざるを得ない現場」という見立ては、実は、さきの Mayo のディスアイデンティフィケーションの議論に合致しないだろうか。両者の違いは、フェミニズムという言葉を肯定的に受け入れているか、受け入れていないかという点だけである。自分らしさや、ジェンダーレス化という表現の中に、新自由主義の精神を持つ資本主義的構造に求められる個人という意味づけが、こっそりと忍び込んではいないだろうか。「内面からジェンダーレスの社会になったら……」という希望は、ジェンダー規範からの自由への希求と同時に、「ジェンダーレス」という新たな

なるカテゴリーへの消費主義による内面からの囲い込みともなりうるとは言えないだろうか。

「COOL なイットガールのフェミニスト宣言」も、フェミニズムという衣装をまとったポストフェミニズムと読み取れる。きらびやかなセレブたちに見いだされる力強いフェミニズム、Be a Boss や、Girl Power といった表現は、消費を第一原則とするファッション誌というメディアの中で領有されることによって、「女性に男性同様の個人的自立のための資源や増大する選択肢、能力主義的達成を認めるようなものを約束」⁽⁴³⁾ しているという意味で、ポストフェミニズムと根を同じくする個人の欲求の表出となってしまった。このようなフェミニズム宣言は、「フェミニズム」という名をもつにもかかわらず、Mayo が危惧するディスアイデンティフィケーション、つまり、女の子たちのある種の（フェミニズムが提示してきた性差別に苦しむ）女というジェンダー・アイデンティティに、もはや自己を見出さないということと、同じコインの裏表であると言えるだろう。そして、結果的に、第二波フェミニズムが「資本主義の侍女」となったことの二の舞を演じるのである。「COOL なイットガールのフェミニズム宣言」は、自由な個人という新自由主義の擁立する主体を称揚することとなる。そのフェミニズムは、社会の不公正の促進に自己が寄与することに盲目である。「COOL なイットガール」も、巧妙な搾取の構造に、参加するものだとも言えるのである。

同様のことは、90年代に若い女性たちの間に共感を呼んだ、“Girl Power”にも言える。最近のファッション雑誌にも登場するフレーズの一つ「Girl Power!」は、「COOL なイットガール」と同様に、消費主義やマーケティング戦略に乗っ取られて、結果的に、新自由主義的な資本主義が要請する個人主義と結びつく機会を与えてしまった。*Oxford English Dictionary*（以下、OED）の Girl Power の定義を見てみよう。

Power exercised girls; spec. a self-reliant attitude among girls and young women manifested in ambition, assertiveness, and individualism. Although also used more widely (esp. as a slogan), the term has been particularly and repeatedly associated with popular music; most notably in the early 1990s with the briefly prominent ‘riot girl’ movement in the United States (cf. RIOT GIRL n.); then, in the late 1990s, with the British all-female group The Spice Girls.

“Girl Power”は、女の子たちや若い女性たちの成功願望や、自己断定的で、個人主義的な、自分に自信を示す態度としての言葉として、OEDには示されている。また、ポップ・ミュージックとの深いつながりという観点もOEDの定義には見出される。イギリスの女性ポップ・ミュージックグループであるThe Spice Girlsの1996年の大ヒット曲となった“Wannabe”によって、“Girl Power”というフレーズは、主要メディアの中に流通するようになり、文化的な現象となった。女の子たちへのエンパワーメントのメッセージそのものであり、また、女の子たちの間の強い友情を示すものであった。しかし、The Spice Girlsの流行とともに、マーケティング戦略として利用されていく中で、“Girl Power”は、そもそもがポピュラーミュージックとの関わりで登場し、女の子たちの間で意味を見出されたこととも相まって、新自由主義に横どりされてしまったのである⁽⁴⁴⁾。

“Feminism”も、“Girl Power”も、“Empowerment”も、商品のコピーとして、クールなものとして、女の子たちの下着やTシャツにしばしばプリントされて登場する。それらは、実際、市場経済の中で、新自由主義のイデオロギーに貢献するものとして、消費されてしまっているのである。フェミニズムのもつ性に基づく差別への抵抗、搾取や抑圧への抵抗の力は、骨抜きである。その意味で、ポストフェミニズムも、近年メディア文化に登場するフェミニズム讃歌も、その根は、それほど変わらない。一方が、平等は達成されたとしてフェミニズムを拒否し、他方は、平等はまだ達成されていないとして、フェミニズムを擁護するとしても、その帰結は、同じである。そんなことはそもそも不可能であるにもかかわらず、女性を誰にも支配されない主体として立ち上げることを、どちらも求めているのである。

若い世代の間のフェミニズムの称揚は、エンパワーメントという言葉に集約されると述べた。しかし、エンパワーメントは(“Girl Power”も)、性に基づく差別や搾取や抑圧を必ずしも解決するものではない。もちろん、フェミニズム、特に、これまで、高等教育機関におけるフェミニスト・ペダゴジーの実践では、エンパワーメントが教育目標の一つとして掲げられてきたし、その重要性は、今も変わることはない。しかし、性に基づく差別や搾取や抑圧は、女という主体の中にも内面化されているという問題に向き合わない限り、新自由主義に領有されたエンパワーメントという概念によって、個人のうちにある差別や、個人の無意識な行為による搾取や抑圧は覆い隠され、その分、知らないうちに、差別や抑圧や搾取が促進する

こととなる。それは、結果的に、新自由主義的資本主義を背景とした自己選択や自己責任の言説を強化し、経済的・社会的な不公正を個人の問題として放置することにつながっていく。他方で、力を得、自由になった個人は、社会構造に起因する不公正を、個人の責任として疑問を持たず担うことになる。その個人は、本人の知らぬところで、不平等や抑圧や搾取に加担していることに気づかないのである。

フェミニズムをクールなものとして称揚する雑誌から、女の子たちが受け取るようなエンパワーメントをめぐる言説には、フェミニズム、すなわち、あらゆる抑圧をなくす理論と運動の集合体であり、性に基づく差別やあらゆる種類の搾取や抑圧をなくす運動であるフェミニズムという側面が失われている。性に基づく差別を認めることと、性に基づく差別から自由になることとは、同じことのように思われるが、同じではない。両者の間には、微妙だが、見過ごすことのできない違いがあるのである。もし、女の子たちが、社会経済的な観点からの成功のみを追いかけるのであれば、男性中心の世界にこれまで流通する言説、つまり、性差別の言説に内在する要素を維持していることになる。性差別を認めることと、性差別から自由になることとの間の微妙な違いを見分けられない限り、わたしたちは、引き続き、性差別の言説を生み出し続けることになる。

おわりに

ポストフェミニズムと第三波フェミニズムについて論じた論稿の中で、三浦は、Valerie Walkerdine の議論を参照しながら、「フレキシブルな自己管理が求められるのは新自由主義とその市場原理主義の要請」だとする Walkerdine の議論に賛同しつつ、「劣悪な環境で過剰な労働負担を押し付けられながら、自己責任と自助努力のレトリックを内面化して、「自分が悪い」、「自分がより努力すれば何とかなる」⁽⁴⁵⁾と押しつぶされていく女性労働者の立場を改善すること」を求める Walkerdine の議論に対して、次のように述べる。

市場原理と自己責任を結びつける新自由主義の一般のレトリックを批判するだけではなく、(とりわけ、市場原理と自己責任のレトリックがまさしくわれわれの多くにとって内面化されて、「国の経済発展のためにはそれが必要なのだ」と論じられるとき)それがどのようにジェンダー化され、女性を「特権化」しているかを指摘しつつ、その性差別をどのように突破していくかが示される必要があるだろう。つ

まり、それが、新自由主義から発せられた（自己責任や自助努力といった）文化レトリックをポストフェミニズムとしてより具体的に捉えながら、ポストフェミニズムの外部を考えることである。⁽⁴⁶⁾

近年の若い世代によるフェミニズムへの讃美が、新自由主義的な個人主義の思考と在り方に、容易に結びつくことを検証した後に、果たしてわたしたちは、そのようなポストフェミニズムの外部を想像することができるのだろうか。実際、三浦が危惧するように、わたしたちは、勝ち組、負け組と呼ばれる女の分断という現状に直面している。女の分断は、生まれた時から、競争の結果は自分の責任という考えを内面化し、自分自身をも、自らが内面化した差別的、性差別的、家父長的な見方、考え方で定義していることによる一つの帰結だと言える。女の分断は、先の Mayo による、ディスアイデンティフィケーションの議論にも見られた。ジェンダーに関わる問題、すなわち、社会的歴史的な文脈の中で捉えられるべき問題が、個人主義的な説明モデルへと落とし込まれることで、あらゆる人生の失敗を、それが、女性というジェンダーの社会的・政治的文脈と不可分にもかかわらず、個人の問題としてみなすことになる。そして、わたしたちは、わたしたち自身を、他者から分断してしまうのである。したがって、ジェンダーについて教えることにかかわって、カリキュラム自体も、歴史的社会的な文脈の観点から、構築される必要がでてくるのである。

しかしながら、実際のところ、フェミニズムを資本主義の侍女の役割から解き放つことは、ポストフェミニズムを通して、フェミニズムを通して容易ではないことを、本稿は論じた。*Times* の表紙にあるように、フェミニズムはずっと前に死んでしまったように見えるし、今も、死んだままのように見える。

三浦自身は、Budgeon が「第二波フェミニズムの批判として登場したポストフェミニズムへの応答としての第三波フェミニズム」と呼ぶものに、期待を寄せる。第三波フェミニズム運動を見極めようとするとき、bell hooks によるフェミニズムの定義は、意義深いものとして立ち現れると考える。*Feminism is for Everybody* で、「フェミニズムとは、性に基づく差別（sexism）や搾取や抑圧をなくす運動のこと」と定義している⁽⁴⁷⁾。hooks は、「わたしたちはみな、女であれ男であれ、生まれてからずっと性差別的な考えや行動を受け入れるよう社会化されている」と述べる。自分自身と向き合い、見つめ直し、そこにあるものに抵抗し、変えていきなさいという考え方である。そこにあるものとは、性に基づく差別であり、資本主義的

経済によって推し進められた搾取や、差異を認めないことによるアイデンティティの抑圧でもある。階級による文化同士の衝突に抗い、女性の連帯は、可能になるのか。「階級をこえた女の連帯を構想するという意味においてこそ、新自由主義化における運動として、第三波フェミニズムは意味を持つ」⁽⁴⁸⁾とする三浦の言明と対比させたとき、hooksのフェミニズムの定義は、彼女が1984年出版の本に掲げたものから変わっていないにもかかわらず、今でも意味ある定義として、受け取ることができる。

先に批判的に検討した“Girl Power”は、hooksの提示するようなフェミニズムを第二波フェミニズムと第三波フェミニズムの間に渡す力を持つ言葉であり、アカデミックなフェミニズム理論を背景に、アメリカ合衆国の各地で女の子たちの連帯を可能にした草の根運動を駆り立てる力ともなった言葉でもある。先に述べたように、The Spice Girlsの登場によって、“Girl Power”は新自由主義に横取りされてしまったが、他方で、“Girl Power”をめぐって、まさに地下茎が地の下を横に伸びていくように、女の子たちが各地でライゾーム的に連結していったフェミニズム運動には、新自由主義に乗っ取られることのない可能性を秘めていた。また、教育学的に言っても、フェミニスト・ペダゴジーの根幹にある批判理論を実現する可能性を秘めていた⁽⁴⁹⁾。歴史的社会的に共有されたジェンダーの諸状況を理解することに基づくカリキュラムモデルの構築が、どのように可能なのかを考察する上でも、意義深い運動であった。もちろん、その運動は、一枚岩ではなかったし、新自由主義と親和性の近いものも、新自由主義に乗っ取られることもあり、批判的な検討なしに、可能性を措定することはできない。それにしても、女の子たちの草の根運動は、三浦がポストフェミニズムの外部を考えることにつながるかもしれない。あるいは、そのライゾーム的なあり方から、新自由主義の精神を持つ市場原理主義的社会構造の蔓延に加担したポストフェミニズム、そして近年のフェミニズム讃歌に由来する個人主義が地表を覆い尽くす中、その地下にその力をぐんぐんと伸ばすものとして、自由な個人主義を地下で解体するものとして、見なしうるかもしれない。あまり希望を持って語ることは、再び、さまざまな批判を呼び込むことにもなるが、女の子たちの草の根運動の教育的可能性についての考察は、別稿で実現したい。

註

- (1) 三浦玲一「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性—『プリキュア』、『タイタニック』、AKB48』、『ジェンダーと「自由」—理論、リベラリズム、クィア』三浦玲一、早坂静編著（彩流社、2013年）、62頁。
- (2) 石ヒョン『ジェンダー・バックラッシュとは何だったのか—史的総括と未来へ向けて』（インパクト出版会、2016年）。
- (3) Marisa Seltzer, "Who Is a Feminist Now?" *New York Times*, May 21, 2014, http://www.nytimes.com/2014/05/22/fashion/who-is-a-feminist-now.html?_r=0
- (4) Cf. Chimamanda Ngozi Adichie の TED Talk は、書籍になっている。Chimamanda Ngozi Adichie, *We Should All Be Feminists* (London: Fourth State, 2014)。
- (5) Ms Magazine, "The Feminist Factor: More than Half of 2012 Women Voters Identify As Feminists," *Ms. blog*, March 18, 2013, <http://msmagazine.com/blog/2013/03/18/the-feminist-factor-more-than-half-of-2012-women-voters-identify-as-feminists/>
- (6) Barack Obama, Glamour Exclusive: President Barack Obama Says, "This Is What a Feminist Looks Like," *Glamour*, August 4, 2016, <http://www.glamour.com/story/glamour-exclusive-president-barack-obama-says-this-is-what-a-feminist-looks-like>
- (7) Associated Press and the Thomson Reuters Foundation, "Justin Trudeau: When I Call Myself a Feminist, Twitter Explodes," *The Guardian*, March 17, 2016 <https://www.theguardian.com/world/2016/mar/17/justin-trudeau-feminist-twitter-explodes>
- (8) Emma Watson, "Gender Equality Is Your Issue Too," *UN Women*, September 20, 2014, <http://www.unwomen.org/en/news/stories/2014/9/emma-watson-gender-equality-is-your-issue-too>
- (9) Cris Mayo, "Gender Disidentification: The Peril of the Post-Gender Condition," in *Education Feminism: Classic and Contemporary Readings*, eds. Barbara J. Thayer-Bacon, Lynda Stone, and Katharine M. Sprecher (Albany: State University of New York Press, 2013)。
- (10) Genevieve Parkhurst, "Is Feminism Dead?" *Harper's magazine*, May 1935, <http://harpers.org/archive/1935/05/is-feminism-dead/>; Also see, Laura Ruttum, "Is Feminism Dead?" *New York Public Library*, March 25, 2009, <https://www.nypl.org/blog/2009/03/25/feminism-dead>
- (11) Susan B. Anthony (1820 – 1906) は、女性参政権活動家。Elizabeth Cady Stanton とともに、奴隷解放、既婚女性の財産権、女性参政権などの確立に尽くした。
- (12) Betty Friedan (1921 – 2006) は、アメリカの女性解放運動家。*The Feminine Mystique* (1963) の著者でもある。全米女性会議（略称 NOW）を組織し、女性解放運動を展開した。
- (13) Gloria Steinem (1934 –) は、アメリカの女性解放運動家。雑誌 *New York* のコラムニストであり、新聞雑誌への寄稿のかたわら、社会運動に参加した。1972 年に雑誌 *Ms.* を創刊した。
- (14) Ally McBeal は、米国の法廷コメディドラマのタイトルであり、主人公の名前でもある。1997 年から 2000 年まで FOX で放送された。ボストンにある法律事務所まで弁護士として働く Ally McBeal の主に恋愛をめぐる私生活や、法廷での仕事の様

子を描いている。日本では、NHK で放送された。

- (15) 菊地夏野「ポストフェミニズムと日本社会—女子力・婚活・男女共同参画」、『ジェンダーにおける「承認」と「再配分」—格差、文化、イスラーム』、越智博美、河野真太郎編著（彩流社、2015 年）。
- (16) 菊地、「ポストフェミニズム」、74 頁。
- (17) 菊地、「ポストフェミニズム」、73 頁。
- (18) 菊地、「ポストフェミニズム」、74 頁。
- (19) 菊地、「ポストフェミニズム」、74 頁。
- (20) 菊地、「ポストフェミニズム」、74-5 頁。
- (21) 菊地、「ポストフェミニズム」、75 頁。
- (22) 菊地、「ポストフェミニズム」、75 頁。
- (23) 菊地、「ポストフェミニズム」、75 頁。
- (24) 菊地、「ポストフェミニズム」、80-1 頁。
- (25) 菊地、「ポストフェミニズム」、76 頁。
- (26) 菊地、「ポストフェミニズム」、84 頁。
- (27) Nancy Fraser, "How Feminism Became Capitalism's Handmaiden - And How To Reclaim It" *The Guardian*, October 14, 2013, https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/oct/14/feminism-capitalist-handmaiden-neoliberal?CMP=tw_tgu
- (28) Nancy Fraser, *Fortunes of Feminism: From State-Managed Capitalism to Neoliberal Crisis*, (London: Verso, 2013), 220.
- (29) Fraser, *Fortunes*, 221.
- (30) Fraser, *Fortunes*, 221.
- (31) 菊地、「ポストフェミニズム」、73 頁。
- (32) Mayo, "Gender Disidentification."
- (33) Mayo, "Gender Disidentification," 243.
- (34) Mayo, "Gender Disidentification," 244.
- (35) Mayo, "Gender Disidentification," 245-6.
- (36) Mayo, "Gender Disidentification," 249.
- (37) Mayo, "Gender Disidentification," 249-50.
- (38) Mayo, "Gender Disidentification," 250.
- (39) Mayo, "Gender Disidentification," 250.
- (40) Mayo, "Gender Disidentification," 250.
- (41) *GOSSIPS*, 2016 年 3 月号、日本ジャーナル出版。
- (42) aggieiiiiii 「フェミニズムについて考えてみる～COOL なイット・ガールズのフェミニスト宣言」、*Vogue Japan Girl*, 2016 年 2 月 3 日、<http://voguegirl.jp/lifestyle/20160203/feminism-introduction/>
- (43) Fraser, "How Feminism Became Capitalism's Handmaiden."
- (44) Girl Power と新自由主義による Girl Power という言説の領有、また、女の子たちの政治的主体の（不）可能性についてのいくつかの興味深い議論がある。例えば、Jessica K. Taft は、大衆文化を通して提示される Girl Power が、政治的な意味を抜き取られ、実際には、女の子たちをフェミニズムのポリティクスに参加させないような障壁を作っていると論じる。他方で、大衆文化に意味付けられた Girl Power を再定義し直し、非政治化された Girl Power に異議申し立てをしてい

る女の子たちの草の根運動組織があることを論じながら、それらは、大衆文化と非対称的な力関係にあるものの、Girl Power がヘゲモニックな闘争の場になっていることを示唆する。Jessica K. Taft, “Girl Power Politics: Pop-culture Barriers and Organizational Resistance,” in *All About the Girl: Culture, Power and Identity*, ed. Anita Harris (New York: Routledge, 2004). また、Marnina Gonick は、Girl Power と、女の子たちの間の現象として論じられた Reviving Ophelia とを比較し、それらは、一見、正反対の意味を持つように見えるが、新自由主義の女の子の主体を生み出す共犯関係にあることを論じている。前者は、自己決定ができる個人を代表し、後者は、自己決定できる主体を生み出すことに成功していない女の子たちの心配を、個人的なものへと追いやり、結果的に、経済的格差や不平等が、構造的な問題としてよりも、個々人の状況や、個々人のパーソナリティの問題ということによって説明されるように、注意を向けることに、貢献しているという。Marnina Gonick “Between ‘Girl Power’ and ‘Reviving Ophelia’: Constituting the Neoliberal Girl Subject,” *NWSA Journal* 18, no. 2, (2006) : 1-23.

- (45) 三浦、「ポストフェミニズムと第三波フェミニズム」、72 頁。
- (46) 三浦、「ポストフェミニズムと第三波フェミニズム」、72 頁。
- (47) bell hooks, *Feminism is for Everybody* (Cambridge, MA: South End Press, 2000), viii. この定義は、hooks は、この定義を 1984 年に出版した *Feminist Theory: From Margin to Center* にて、提示しており、この定義を使い続けている。なぜなら、この定義は「フェミニズムが反男性運動ではないということを明確に示しているからだ」という。「問題はセクシズム（性に基づく差別）であることを明確にするからだ」とする。
- (48) 三浦、「ポストフェミニズムと第三波フェミニズム」、76 頁。
- (49) Girl Powerムーブメントと、フェミニスト・ベダゴジーの関係性について言えば、Alison Piepmeier は、“girl zines”という 1990 年代に女の子たちが全米のいたるところで個人的に作った出版物が、フェミニスト・ベダゴジーに共通する教育的な役割を果たしたことを論じている。Alison Piepmeier, *Girl Zines: Making Media, Doing Feminism* (New York: New York University Press, 2009). また、Jessica Ringnose と Emma Renold は、フェミニストとして活動する 10 代の女の子たちが、規範化した異性愛主義や性暴力が染み渡った仲間内の文化の中で、フェミニストとしてのアイデンティティとメディアが提示する女らしさとの間の葛藤を、容易ではないものの、どのように乗り切ろうとしているかを描きながら、これらの女の子たちが個人個人として経験する社会的で文化的で政治的な領域の理解から始めるフェミニスト・ベダゴジーの可能性を探っている。Jessica Ringnose & Emma Renold, “Teen Feminist Killjoys?: Mapping Girls’ Affective Encounters with Femininity, Sexuality, and Feminism at School,” in *Girlhood and the Politics of Place*, eds. Claudia Mitchell and Carrie Rentschler (New York: Berghahn Books, 2016).